

平成 28 年度 第 4 回政策討論会第二分科会要点記録

日 時	平成 28 年 10 月 17 日（月）	午後 3 時～午後 4 時 35 分
場 所	第一委員会室	
出席者	雪本 清浩（座長） 池内 矢一（副座長） 澤田 和代 松本 妙子 池田 啓子 稲田 悦治 中井 良介 岸田 厚	
欠席者	井上 孝三郎	

テーマ「地場産業の発展について」

【各座員による討論】

- 本市における地場産業とは何かということとなるが、製造・加工業もほとんどが下請け・孫請けという現状であり、完成品を出荷できるというものはありません。よって、親会社の指示通りに仕事をこなすことで『良』としていられると思われる。よって、価格競争に陥り経営危機を招くこともあり、下請け業者が衰退するという現況であると思われる。

例えば、京都における『着物』という完成品は、デザイン・染め・縫製等の着物という完成品までを京都で完結している。よって仮に染め工場が経営危機ということになれば、元請け先が経営に対する援助も惜しまない。着物の完成にいたるそれぞれの作業工程が連動して製品となることから、一つの工程に携わる事業者が一つ欠けても完結できないのである。だからこそ、京都ブランドとしての『着物』が継承できていると思われる。一方、本市ではそのような形態にないため、『岸和田ブランド』と認定したとしても、その広がりはない。まして、認定する側は認定するだけで、認定することで目的を達成したと思っているようである。

以前から感じていることで、例えば、商工会議所において、異業種交流会が開催されていたと思うが、参加されていた方などのお話を聞く限りでは、活発な意見もなく、参加者も徐々に減り、最後には同業者ばかりが残り、その場でも建設的な意見も少なく、抜け駆けしてでも同業者の仕事を横取りしよ

うというような発想しか見えなかったということであったように記憶しています。『共にがんばろう！』という発想が少なく、順調に事業が進んでいる会社等があれば『足』を引っ張るような、イメージが強いようである。頑張る企業が多数出現することを期待している。

少し話は変わりますが、『岸和田ブランド』に認定された商品は増えているものの、認定しただけで終わっている。たとえば、『村雨』という和菓子があるが、『村雨』ではなく、〇〇商店の『村雨』となるため、広がりはない。『村雨』を製造している市内商店の『村雨』をすべて認定すべきでそれぞれの特色ある味があっていい訳であるし、いい意味での商店間の競争に繋がり、より一層の広がりが期待できるのではないかと思う。又、以前から『桃』『みかん』は栽培されているが、近年では、『イチジク』や『ブドウ』等の果実栽培も盛んになっているようである。それらの果実を『岸和田ブランド』として認定しているものの、これも同様に認定しただけで終わっていると思われる。本市担当課も商工会議所も、次の一手を全く考えていない。広がりが無いのも当然である。市内の喫茶店や和・洋菓子屋等、果実を使用し商品化できるところに対して何のアプローチもしない。飲料組合に働きかけ、岸和田市内で例えば、イチジク・桃を使ったパフェや和・洋菓子をPRし、使用した商品の『のぼり旗』を店先に立てて、岸和田市内の多くの商店で取り扱うことによって、初めて『岸和田ブランド』としての広がりが出ると思われる。岸和田市及び商工会議所には『岸和田ブランド』を売り出すという姿勢が全く見受けられない。

本市でも、神戸長田町にある『鉄人28号』は高い技術力によって、北海鉄鋼が作ったことで有名になったり、又、松浪硝子も同様に、その高い技術力によって、高い世界的シェアを誇る医療機器関連品は早くから内外から高い評価を得ている。これらの企業は、取引先がメジャーであり、岸和田市内等を対象としていない。本市では他の小規模・零細企業等が頑張っているこそ、本市の取り組みである『頑張る企業に応援』できるのであって、頑張る企業が多く出てくることを期待するしかないのであるが、本市としての役割を実効性のあるものにするための具体的な手立てを考え、商工会議所にも積極的に本市の取り組みに協力し、支援策を具体的に提示することも必要である。

- 岸和田観光産業は盛んだが、宿泊場所がないのが弱点。
- 水産業は、あなご、がっちょが美味しいと聞く。
岸和田漁港にあるお店、あなご料理が美味しいとテレビで放送。
いつ行っても満席。あなごの漁獲が追い付かなくて、他市に仕入れに行ったこともあったとの嬉しい悲鳴。
- 桃の収穫で今年初めて、害虫被害で4割減のお家。

いちじく、ニンジン、みかん、水ナス作りも盛ん。

水ナスで岸和田ブランドに認定されたお店。

「おかげで、全国へ発送させていただいている」と喜んでおられる。

- 地場産業としてのせんい工業を考えたい。文献を読んだので紹介する。

せんい工業は 1970 年代をピークに、中国、東南アジアからの輸入で、国内では大幅な減少傾向になった。しかし大阪は今も、綿品目関連の出荷額は全国で上位であり、多くは 1 位となっている。

事業所の減少はせんい工業の工程に影響する。その一つがサイジング業である。サイジング業は綿物業が綿スフ織機を動かす準備工程として、経糸の整経、糊付けを行なうが、ボイラーなどの燃料装置、水や糊を溜める漕が必要で、規模の大きな装置となる。泉州ではサイジング業 1 社で織物業約 30 社を取引先に持たなければならない。織物業が減少すればサイジング業も廃業する。

泉佐野市のあるサイジング社がおよそ 60 社の織物業者と取引していたが、経営危機に陥った。この社は綿糸などの短繊維からポリエステル等の長繊維まで対応範囲が広く、技術・ノウハウの引き出しの多さと対応力の高さを持っていた。この社が廃業すれば産地内の綿スフ業者の製織に支障をきたすことになる。

このとき、岸和田の辰巳織布が資金を投入し、規模を縮小しつつより質の高いサイジング技術を実現しようとして営業を継続させた。こうして産地の中核であった有力なサイジング業のノウハウを残し、産地の工業分業を保全した。

斜陽とされるせんい工業にあって、岸和田にこのような取り組みをし、高い技術を持つ企業があることを評価したい。1 社の事例であるが、岸和田の産業の振興に示唆を与えるものだと思う。行政がこのような取り組みにどう支援するか、考えるべきである。

- 岸和田漁港で水揚げされるシラス、たまねぎなど新たに岸和田ブランドの仲間入りするというような情報を得ました。以前の政策討論会で、大阪府内でも有数の漁獲高、農産物の出荷数をほこる点から、岸和田の名産として、特化すればよいのではと意見を出しました。

岸和田の農業、漁業の特徴が生かされていると思います。

今後、その材料を使って加工品、販売、宣伝の工夫をすればいいのではないのでしょうか。

- 前回産業振興課から岸和田の産業の現状の説明をうけ、なにか特産になるものはないかと考えて「丘陵地の竹」の利用を思いつきました。すると先日配布された岸和田市産業振興新戦略プラン（2015 から 2020）の 6 頁竹バイオ

マス燃料、竹プラスチック製品の普及に取り組んでいるとあり、すでに、着眼していることに感嘆致しました。

- 丘陵地の竹資源の有効利用と温室効果ガス排出削減取り組みを結びつけて、地球にやさしい岸和田をPRすればいいのではないのでしょうか。
竹資源の有効利用についてはプロポーザル方式で今年実施されていて、結果を待ちたいです。また竹の有効利用については「全国竹の大会」などもひらかれていて、関心の高さを再認識しました。

岸和田の地域がもてる特徴を生かして、商品化し、アピールすることに力を注ぎこめば良いのではないのでしょうか。

- 先日、漁協主催の「親子まつり」に行ってきました。そこに、岸和田産業高校の生徒が地元の魚介類を使った新しいレシピでお店を出していました。地元の物を使って、製品やメニューを若い人たちの新しい発想を引き出すためにコンクール形式で盛り上げていったら、後継者づくりにもなるのではないのでしょうか。
- がんばる人たちを資金的にも応援する施策を手厚くし、底支えすることが行政に求められるのではないのでしょうか。
- 岸和田において有名な企業が複数ある、しかし市全体として広がりを持つような業種ではなく、特化された技術力や製品が評価されているので、市内で広がりを持つかといえそうはならない。
- 地場産業といってもなかなか難しい、岸和田ブランドとして認定された商品があるが、その店のその商品としてのブランドでしかない、例えばブランド品が、基準が満たされればすべて岸和田ブランドに認定しますよとなれば広がりも出てくるのではないかと思う。
- 前回、学習した産業振興新戦略プラン、さらに以前(H13 年)産業振興ビジョンも出されているが、各専門業種の方から専門研究者が、調査・研究し、議論を重ね総力挙げて発表したもので、私が簡単に意見を言えないと思っているが、感想的に言えば繊維の町と言われ、市内には多くの機織り工場があったが、今は大変少なくなった。泉大津といえば毛布、泉佐野といえばタオル、というように、岸和田といえば…というものがないのではないか。起毛するために使うチーゼルも盛んだった岸和田で、毛布を独自に発展させることができなかったのは、残念である。現在は、「きしわたの会」などのグループが、綿の種から綿を栽培し、Tシャツやベビー用品を製品化する活動をしている。これを岸和田の特産品にしていくとしたら、行政としてなにをすればいいのか。というようなことを考えていけば、新しい岸和田市の産業の発展につながるのではないかと考えてみた。また、岸和田ブランドで、多くの商品が認定されている。これも一商品に終わらせるのではなく、生産や販路の拡

大をサポートすることで、岸和田といえどという、名産になっていくのではないか。

特に、生産者・労働力の減少を心配する、漁業や農業など、漁師さんや農家さんの個々責任でなく、行政からの具体的なサポートで、岸和田に行けば…が買える、～が食べられるというように新たな名物になり、市内商店にも景気が広がっていくのではないか。鎌倉へ行けば、どの飲食店でも競って生しらす丼をメニューにしている…ように。

- 後継者問題では、人材育成と規制緩和が求められ、事業規模の問題では、製品の需要喚起や売上げの拡大と規制緩和が求められる。
経営能力の問題では、商品価値を高めるために単一原料による多品種商品の開発や、下請け加工から最終製品の製造への転換が求められる。
- 農業従事者の平均年齢は、73歳となっており5～10年の間に後継者問題を解決しなければならない。
- 臨海部の工場では、生産規模の拡大を希望する企業があるが、敷地の制約で実現できないところがあると聞いている。
- 商工会議所とJAいずみでは、生産拡大の為に規制緩和や環境整備を望んでいるようである。
- 『産業の発展』について、産業の「飛躍」を目指すのか、「底上げ」を目指すのかも議論が必要である。

【次回に向けて】

平成28年11月28日（月） 午後1時～

- ※ 第5回政策討論会では、『地場産業』を発展または好循環の継続をさせている「他市の先進事例」を挙げて頂き、それらの具体的な内容について討論する。

以上